小説版

すすぎ雨

耐え難き不幸せ　訪れし時
山の命にまみゆべし
まといし衣　たてまつり
天を仰ぎて念ずれば
禍流す　すすぎ雨　降る

その昔。

災害、飢饉、疫病…人々は様々な自然の猛威の前に成す術もなく、多くの大切な物を失った。あまりにも不条理に襲うその不幸の中を、何かに縋りながらも強かに耐え抜いた者もいれば、自らの器では到底受け止められず、途方に暮れる者もいた。

忘れてしまわなければ、無かったことにしなければ、明日を迎えることができない…

そんな苦痛を味わった人は、最後の気力を振り絞り、山に登ったという。

山の神に、身に付けてきた衣服を供える。

そして天を仰いで祈りを捧げる。

するとあたり一帯は不思議な柔らかい光に包まれ、次第にしとしと清らかな雨が降り注ぎ、忌まわしい記憶を、綺麗さっぱり洗い流してくれる――――…

ある日、流行り病で夫と子供を亡くした女が、失意の底で人生を憂い、ひとり山へ入った。村の人々は、もう二度と彼女は帰ってこないだろうと確信していた。しかし、その日の夕方。山から下りてきたその人は、それまでの思い詰めた表情はどこへやら、あっけらかんと、「ふらりと散歩に行った山で雨に降られて大変だった」と笑った。そしてそれからの人生は村の人々に家族のように慕われ、天寿を全うするまで、それはそれは幸せに暮らしたという。

人々はこの不思議な現象を、山の神様のご加護だと考えた。忘れたい記憶を忘れることができるということ、それはすなわち〝救済〟。

ちっぽけな我々人間には抱えきれないほどの不幸が降りかかったとき、神は時にそれを気の毒に思い、その者がもう一度だけ幸せな日々に戻ることができるよう、お取り計らいくださるのだ。

衣服は、外界との境界となり、自身の身体を守る最後の砦。それを脱ぎ捨てることで、「もうこれ以上失うものありません」と山の神にお示しし、ご慈悲を乞うことになるのだという。

そうして人々は神への畏敬の念を込め、その清らかな雨のことを、「山の命のすすぎ雨」と呼んだのである。

時代は流れ、私たちは先人たちの絶え間ない努力の恩恵を受け、あらゆる自然の猛威を克服した。すぐそばにあった命の危機はいつの間にやら手の届かないところへ遠ざかり、長きに渡って築き上げられた

「安全」という神話を揺るがすようなものは、まるで触れてはならない禁忌のように、目に触れぬところへと隠されている。

それでも、不思議なことに、人生を憂う人の数は〝あの頃〟と変わらない。理由は違えど、この世の中を幸せに生き抜くことは、やけに難しい。

ある3月の昼下がり。頭を垂れてとぼとぼと歩くこの少女も、令和のこの世の中で、人生を憂う人の一人である。

＊

晴れやかであるはずの、旅立ちの日。同級生たちのはしゃぐ声が耳障りだった。ただ、明日から、いや、金輪際、二度と顔を合わせることのない人たちだと思えば、どうだっていい。どのみち、私の〝席〟は、あそこにはない。いや、もしかすると、始めからなかったのかもしれない。世界中のどこを探したって、私の居場所なんて、あるはずがない。

周囲の大人に説得されて、進学は決めた。でも、目的なんて、ひとつもない。ましてや、目標なんて考えたこともない。場所が変わったって、周りが変わったって、私という人間は変わらない。どこにいったって私は私なのであれば、この息苦しさはついて回ってくるのだろう。

私の心の空模様を映したかのような、どんよりと空。今にも雨が降りそうだけど、そんなことはもはては大した問題ではない。

全部、忘れられたら変わるだろうか。

あの日言われたあの言葉も、みじめでたまらなかするすると、私の頭からひとりでに抜け出してこい。線香の煙が細くたなびいて、やがてすうっと、うに。

無かったことになればいい。全部まとめて、どこか私がこんなにみじめだなんて、二度と思い出さなく

どうして、みんな勝手に私から離れていくの。私はある。

どうして、私を否定するの。誰にだって欠点はあ

どうして、放っておいてくれないの。その慰めが

る。

どうして、どうして、誰一人として私を愛してく

ずっと見ないふりをしてきた、私をとりまく醜い

妬み、苛立ち、恨み、諦め、劣等感…これらは一

いつの頃からかそれらは常に私の足元で渦巻いて

るごと取り込んでやろうと、その時を待っている

全篇の小説版「すすぎ雨」は

こちらから

https://sato-potsuri.stores.jp/